石川
ISHIKAWA PREFECTURAL MUSEUM OF HISTORY
れきはく
No.120
2017.2.7

早春の企画展①
「れきはく コレクション2016」

「九谷猿模様大平鉢」（十村富樫家資料のうち）

明治時代の九谷焼で赤絵の鉢。亀甲つなぎ文様を周囲に配し、中央に方形の枠取りをして、たわわに実った栗の枝と仲良く戯れる猿15匹が描かれている。高台のなかに「石川縣金澤板坂製造」とある。

割れたものを繋ぎ合わせて補修がなされており、猿模様が奇抜でユーモラスなことに加えて、補修の技術や補修の経緯なども興味深いものがある。

寸法：直径56.5cm、高さ8.7cm（高台高さ1.8cm）

■会　　期　平成29年 2月11日（土・祝）～3月20日（月・祝）　会期中無休

■会　　場　石川県立歴史博物館　特別展示室

■開館時間　午前9時～午後5時（展示室入室は午後4時30分まで）

■観 覧 料　一般300円（240円）　大学生240円（190円）　高校生以下無料
（　　）内は20名以上の団体料金　65歳以上は団体料金
上記料金で企画展「村松コレクションの書と絵画」・常設展もご覧になれます。

早春の企画展① れきはくコレクション2016

開催によせて

本展覧会は、博物館が1年間にどのような資料を収集したのかを、お披露目する目的で毎年開催されております。おかげさまをもちまして、今年度も近現代の資料を中心にたくさんの資料をお寄せいただきました。貴重な資料をご寄贈くださったみなさまのご厚情に心より御礼申し上げます。

近世資料では、石川郡高尾村の十村（とむら）富樫家に伝来した調度品の内、陶磁器の大鉢や文芸関係の額などの貴重な資料をご寄贈いただきました。また、金沢出身の大村欣一氏が収集した刷物コレクション（畿内を中心とした寺社の案内絵図や略縁起などの刷物）もご寄贈いただきました。

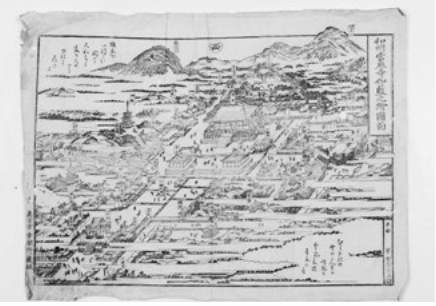
その他、昭和戦前・戦中期の映画館プログラムや古写真、かつて軍都であった金沢の記憶をとどめる戦争関係資料、生業に関する民俗資料など、石川の歴史・文化を伝える多彩な資料をご紹介いたします。

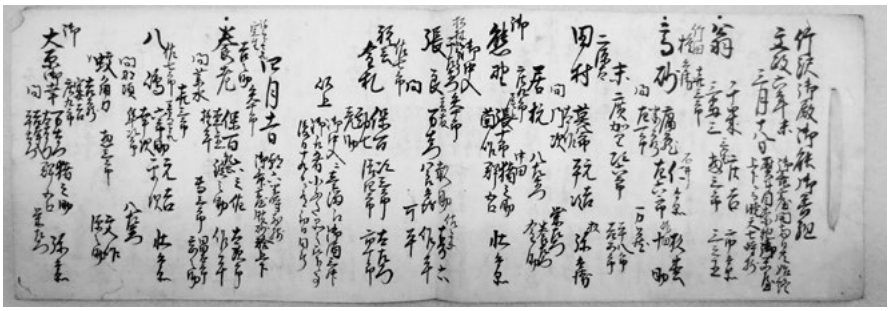
会期中には、当館学芸員がリレー方式でお話しする展示解説会も開催いたしますので、ぜひご来館ください。

関連行事

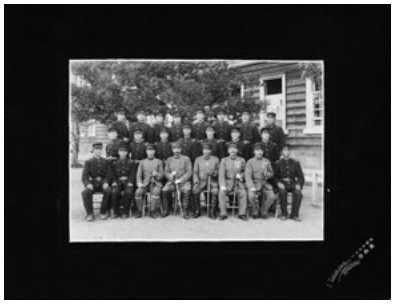
・展示解説
平成29年3月4日（土）13：30〜14：30
※事前申し込み不要。参加ご希望の方は観覧料が必要です。

・ミニコンサート
平成29年2月11日（土・祝）13：30〜
平成29年2月25日（土）13：30〜
※事前申し込み不要。参加無料です。


No.3　和州当麻寺伽藍之絵図面（江戸時代）


No.5　竹沢御殿御能御番組（文政6年（1823））

No.9　帝国劇場映画プログラム（昭和17〜18年）


No.10　歩兵第7連隊将兵集合写真
（明治後期〜大正初期頃）

No.12　髪飾り（明治〜大正時代）

No.11　高砂文字入松竹鶴亀文様柄鏡
（江戸時代後期）

収蔵資料一覧（平成28年4月～29年1月末現在）　※各分野受け入れ順・敬称略

No.	資料名	点数	寄贈者
歴史資料			
1	金沢城兼六園図屏風	1	大村　昭男
2	祭礼図絵巻	1	大村　昭男
3	大村欣一氏刷物コレクション	46	三田　良信
4	金谷御殿御能御番組　壱	1	建部　昭男
5	竹沢御殿御能御番組	1	建部　昭男
6	御本腹二付御能御番組	1	建部　昭男
7	宝生大夫勧進能番組（印刷）	1	建部　昭男
8	十村富樫家資料	16	富樫　茂
9	中原良三氏関係資料	15件(124点)	中原　強
10	福田家戦争関係資料	66	福田　信一

No.	資料名	点数	寄贈者
民俗資料			
11	高砂文字入松竹鶴亀文様柄鏡	1	個人
12	髪飾り	27件（41点）	個人
13	手絡	23件（27点）	個人
14	半衿	7	個人
15	ケン	1	中野　実
16	ツメキリ	1	中野　実
17	ス（イワノリ用）	4	中野　実
18	ス（ワカメ用）	1	中野　実
19	ワラジ（ヨシ刈り用）	1	不動　孝七

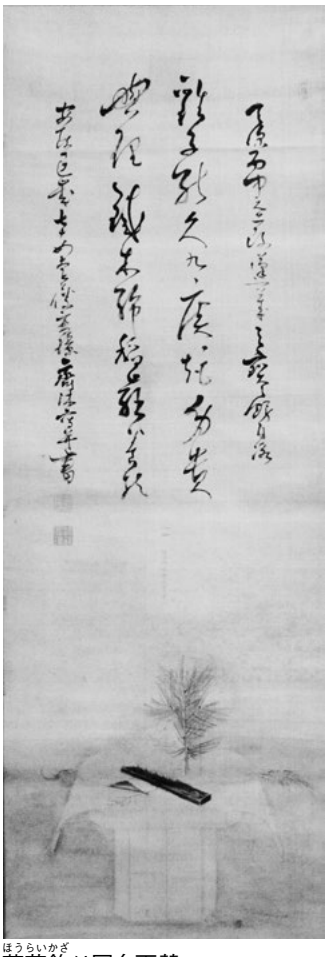
早春の企画展② 村松コレクションの書と絵画

平成29年2月11日（土・祝）～3月20日（月・祝）

藩政時代、金沢で江戸三度飛脚の棟取をつとめた由緒のある村松家より寄贈をうけた郷土資料の中から、江戸時代18から19世紀の「絵画」と「書」にテーマをしぼった26点と、個人蔵の「矢立」（携帯筆記用具）の逸品12点、印籠・根付など30点、合わせて68点を展示します。

その内、絵画関係は22点です。六代梅田九栄や福島秀川などの狩野派の絵師のほか、寺島応養や津田莱窠・寺西芸園・深山台州・横山致堂・青山淇水などの加賀藩士、多々良西皐や高井二百などの家柄町人や社家などの南画の系統になるものが圧倒的に多く登場します。ほか、遠藤高璟や矢田四如軒・村田翠丈（千里）・村東旭などの佳品に加え、河合見風や島林甫立などの俳人や無学愚禅など僧侶の手になるものもあります。

書は4点です。仏海天龍や前田直方・山本源右衛門・浅野屋秋台など、これまた僧侶や加賀藩士、町人などが認めたものです。



蓬莱飾り図自画賛
遠藤高璟筆

月に岩竹図
寺島応養筆

関連行事

展示解説　平成29年2月25日（土）14：30～
※事前申し込み不要。参加ご希望の方は観覧料が必要です。

学芸員
コラム

『石川れきはく』雑感

本号は通算120号です。特に節目の号数ということではないですが、年4回発行のペースなので、ここに至るまでちょうど30年。この事業の草創に携わった一人としては、いささか感慨深いものがあります。そこで今回は広報誌について、創刊号前後の頃のことを中心に思いつくまま記してみます。

本誌の創刊日は歴史博物館開館日(昭和61年10月25日）と同じです。開館を間近に控えたその年の春、他所から転勤してきたばかりの私は広報の仕事をまかされ、広報誌作りも担当することになりました。そこで早速、前身の郷土資料館時代（昭和43～60年）の『郷土資料館だより』(1～45号)を通読してみましたが、体裁は官報風、記事内容も堅く、一般向けとしてはかなり敷居が高いものでした。このスタイルをそのまま継続しても、読者は増えそうにありません。新博物館が読者に伝えたい興味深い話題、それは山のようにたくさんあります。どうしたらうまく紹介することができるのか、何の経験もない私には、全くゼロからのスタートでした。

当時の歴史博物館は教育委員会の所管（現在は県民文化局）で、基本構想の文言を見ても、教育面がとても重視されていたことがうかがわれます。「子どもから大人まで、誰もが親しめる博物館」を目指すべく様々な事業計画が練りあげられ、とりわけ学校と博物館との連携が大いに期待されていました。そうした状況から、広報誌も「平易で親しみの持てるもの」ということが強く求められたのです。

発行日は特別展や企画展の開催に合わせることが基本とされたので、まず中心的な記事はそれらの内容紹介になります。しかし定番ともいえる趣旨説明や資料紹介の羅列ばかりでは、これまでのものとあまり変わりません。一般の読者の興味はどこにあるのか、何か面白い紹介方法はないか、課内でずいぶん議論を重ねました。キーワード、Q&A、ミニコラムなどの形式、イラストなどを交えたスタイル、展示室や歴史民俗の話題をユニークな切り口で紹介する連載記事など、様々な考えを提案しながら、向こう一年分の編集計画を固めていきました。今から見ると特にどうということもない陳腐な手法ばかりですが、当時の一般的な博物館広報誌には、まだまだ先例が少なかったように記憶しています。

ところが間もなく「開館は予定通り10月だが、特別展（「冷泉家の歴史と文化」展）は翌春開催」という方針が示され、創刊号で予定していた記念すべき初の特別展紹介の記事掲載は延期、その後の発行計画も初めからやり直しです。メインとなる記事の差し替え案はいろいろ検討しましたが、結局世間にあまり知られていない博物館の基本的な活動を、分かりやすく紹介する記事（「博物館入門セミナー」①～③）を翌年まで連載することにしました。この連載記事には毎回若い女性スタッフの手による図解イラストを添え、わりと好評だったのですが、当時の研究室メンバー全員の姿が描かれているのには笑えます（本誌100号「れきはくトリビア」参照)。でも大事な創刊号なのに、記念の挨拶記事はなし、新しい常設展示の紹介も不十分、今思えば冷や汗ものです。諸般の事情があったとはいえ、いろいろとフォローして下さった初代館長に、改めて感謝の意を表します。

その後の私は、試行錯誤の連続でなかなか満足のいく号を出せず、平成を迎えたところで転勤。約20年ほど経ってから、また縁あって歴博へ復職しました。立場は当時と違いますが、再び広報誌にも関わり悪戦苦闘しています。ただ広報誌を取り巻く状況は、昭和末期の頃とは比較にならないほど大きく変わりました。インターネットやSNS（ソーシャル・ネットワーキング・サービス）の発達で、手軽に様々な情報が手に入るという時代です。では本誌をはじめ、未だに廃れることなく街なかにあふれている紙媒体の広報誌、フリーペーパーなどが果たしている役割は何でしょうか。

ネット関係媒体は確かに伝える力が強力です。情報はコンテンツ(インターネットなどの情報サービスで提供される個々の情報）単位で瞬時に広く拡散し、広報PRとしての効果は大きいものがあります。ただそれらは個々の情報単位でバラバラに広まっていくので、メディア全体のメッセージを伝えることには、あまり向いていないように思います。情報発信側の組織としては、その組織の方向性に沿ったメッセージを様々な記事内容で伝えたい時、紙の広報誌であれば便利な面があります。それには情報伝播の速度とは別の観点での編集が必要になりますが、情報の強弱をつけたり、テーマを深く掘り下げたりすることができます。ネットの環境にない人々にも直接届けることができます。

そうした意味で、本誌は発行部数こそ少ないですが、当館に注目してくれている人々、あるいは偶然手にしてこれから注目してほしい人々にも、しっかりと歴博としての方向性、考え方を伝えるための大事な役割を担っているものと思います。

（学芸主幹兼普及課長　前田武輝）

創刊号（86.10.25）

第2号（86.12.25）

第3号（87.3.31）

第4号（87.7.1）

教育プログラム
Educational Program

秋季特別展ワークショップ

当館では、年間を通して子供を対象にしたワークショップを行っています。どのワークショップも博物館らしい内容となっており、大人でも十分楽しめるものになっています。今回は、その中でも9月後半から11月前半にかけて行われた秋季特別展「城下町金沢は大にぎわい!」関連の3つのワークショップを紹介します。

文弥人形浄瑠璃(でくまわし)を楽しもう!(2016.9.25)

さて、本年度の秋季特別展では日本の古き伝統芸能を紹介しました。伝統芸能ということで子供たちには少し難しい内容となっていましたが、たくさんの方々の参加がありました。まず、一つ目は、「文弥人形浄瑠璃(でくまわし)を楽しもう!」です。内容は、東二口文弥人形浄瑠璃保存会の皆さんによる人形浄瑠璃の上演と体験です。難しい言い回しがところどころあり、子供たちには難しいかと思いましたが、「でく人形」に直に触れ操るうちに、その難解さが徐々に軽減されていったようでした。二つ目は、江戸時代の芸能パフォーマンスショー「猿まわし」です。動物を使った伝統芸ということで問合せも多く、広い屋外で多くの皆さんに見て頂く計画をしていました。しかし、当日はあいにくの雨で、屋外ではなく室内で行わざるを得なくなりました。そのため、見学者が少なくなるのではと心配しておりましたが、2回の公演で200名を超える方々に集まって頂けました。最後は、小松市民歌舞伎の伊澤鉄馬氏を講師としてお招きしての歌舞伎についてのワークショップ「歌舞伎ってなぁに?」です。歌舞伎に関する興味深いお話以外に、歌舞伎の隈取りをお面に再現する体験も行われ子供たちも熱心に取り組んでいました。できあがった作品ひとつひとつにもそれぞれの個性が表れていました。敷居が高そうに思える歌舞伎をより身近なモノに感じてもらえたことと思います。

さるまわしがやってきた!(2016.10.8)

歌舞伎ってなぁに?(2016.10.29)

今回、3回のワークショップを紹介しましたが、今後も皆さんに楽しんで頂けるワークショップを企画していきますのでご期待下さい。

(普及課担当課長　永井　浩)

■催し物案内 Information

展示解説や各種講座などの情報をお知らせします。

○学芸員によるワンポイント解説(全10回)　※要観覧料、申込不要
毎月1回、金曜日に実施している展示解説。当館の学芸員が博物館のみどころを紹介します。
時間　13:30〜14:00　場所　展示室

○れきはくゼミナール(全10回)　※受講無料、申込不要
毎月1回、土曜日に実施している博物館講座。当館の学芸員が独自のテーマを設定し講義します。
時間　13:30〜15:00　場所　ワークショップルーム

○古文書講座(前期・後期各3回)　※受講無料、要申込
当館の学芸員が古文書の読み方や内容を解説します。
時間　13:30〜15:00　場所　ワークショップルーム
＊今年度分の申込は終了しました。

2月　**※2月の休館日　2/9(木)、2/10(金)**

18日(土)　れきはくゼミナール
「道君と伊羅都売―加賀の立国から見える地方勢力―」
普及課担当課長　永井　浩

23日(木)　古文書講座(後期第2回)
「武士の絵日記に親しむ―『流聞軒其方狂歌絵日記』の世界―」
学芸主任　塩崎 久代

24日(金)　学芸員によるワンポイント解説
「戦後復興と成長の日々」　学芸主任　石田　健

3月　**※3月の休館日　3/21(火)、3/22(水)**

23日(木)　古文書講座(後期第3回)
「武士の絵日記に親しむ―『流聞軒其方狂歌絵日記』の世界―」
学芸主任　塩崎 久代

24日(金)　学芸員によるワンポイント解説
「渤海使と古代の湊」　普及課担当課長　永井　浩

■トピックス
Topics

磯田道史氏にご講演いただきました
兼六園周辺文化の森ミュージアムウィーク スペシャル講演会

当館の開館30周年を記念した秋季特別展「城下町金沢は大にぎわい！」に関連した話題をお届けします。ある日、着物姿のお客様（株式会社 金澤syugenの皆様）が熱心に展示をご覧になっていました。あまりにステキだったので、ご開帳再現コーナーで写真を撮らせていただきました。仏像のまわりに置かれた等身大パネルとともに、すっかり空間にとけこんでいますね。

「寺社のご開帳に集う人々」コーナー

また、展覧会終盤の11月3日（木・祝）には、磯田道史氏より「加賀の藩風を語る」と題してご講演いただきました。加賀藩祖前田利家の話から説き起こし、どのようにして前田家の家風や加賀の藩風が形成されたのか、時代背景の解説やユーモアあふれるこぼれ話を交えながら、わかりやすくお話いただきました。1時間半のご講演でしたが、テレビでもおなじみの独自の視点からの分析にひき込まれ、あっという間に時間が過ぎてしまいました。

磯田道史氏講演会

磯田氏から見て「上品で優しく伝統文化を重んじる一方、閉鎖的・保守的で内部完結する」傾向がある加賀。みなさんは、どのように感じますか？

■次回展覧会のお知らせ
Upcoming Exhibition

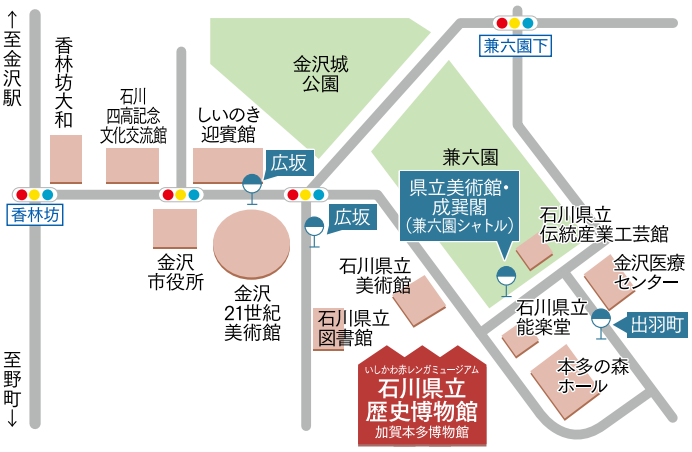
平成29年度春季特別展 **「北前船と日本海海運」**
4月22日(土)～5月28日(日) ※会期中無休

江戸時代に年貢米を財政基盤としていた幕府や諸藩にとって、米を現金化するシステムの整備が安定した社会を維持する生命線でした。日本海を往来した「北前船（きたまえぶね）」は、日本海側に多かった米の主要産地と「天下の台所」と呼ばれた米の集積地大坂とを直結して、米や地域産物の流通に大きな役割を果たし、幕府や諸藩の財政を左右する不可欠の存在とみられています。

さらに、年貢米輸送に関わらず地域間の物資の交易（こうえき）を通して利益を上げていた「北前船」はその何倍にもなり圧倒的に多かったのです。彼らは日本海沿岸の各地に拠点を設け、地元の船宿（ふなやど）や問屋（とんや）と契約を結んで廻船（かいせん）経営の安定を図っていました。

本展では、加賀能登をはじめ加賀藩領内に存在した大船主「廻船問屋（かいせんどんや）」の活動を紹介し、縦横無尽（じゅうおうむじん）に行き来して日本海に巨大な流通ルートを築き上げた「北前船」の全貌を描きます。

北前船模型（本館蔵）



いしかわ赤レンガミュージアム
石川県立歴史博物館
ISHIKAWA PREFECTURAL MUSEUM OF HISTORY
〒920-0963　石川県金沢市出羽町3-1
TEL：076-262-3236　FAX：076-262-1836
E-mail：rekihaku@pref.ishikawa.lg.jp
http://ishikawa-rekihaku.jp/